

## ロマン諸語における語の有縁性と比喩表現について (6)

— ロマン諸語 (フランス語, イタリア語, ルーマニア語, スペイン語, ポルトガル語) と日本語の故事・諺・成句に見られる花の名前による  
比喩表現を中心として —

小倉博史

〈Résumé〉

Dans les langues romanes, la fleur signifie de manière commune la jeunesse, la nubilité et le plein de vigueur. la rose symbolise en français une période joyeuse, gaie dans l'expression venue du latin «cubāre in rosa» soit «être couché sur des roses». En italien «trovarsi in un letto di rose» peut se traduire par «avoir une vie que des autres envient». Le lis indique la couleur «blanche», en français comme en italien. «Effeuille la marguerite» se pratique en français, en italien comme en espagnol. On détache par jeu (ou par superstition) chaque pétale de cette fleur en disant: «il aime, un peu, beaucoup, passionnément, à la folie, pas du tout, pour savoir si on est aimé», le dernier pétale arraché étant censé donner la bonne réponse. La pivoine et le coquelicot sont le symbole de la couleur rouge. Exceptées la rose, la la capucine ou le lilas dont une couleur porte le nom, les fleurs sont associées à des couleurs spécifiques: rouge pivoine, rouge coquelicot, le lis blanc. . . . Si, pour les Japonais, la fleur de cerisier occupe une place particulière dans l'imaginaire collectif, en France la rose a une place à part depuis l'époque gréco-romaine.

Il semble que chaque Français (e) se souviennent du poème de Pierre de Ronsard, ode à sa maîtresse et commençant par ces mots magnifiques: «Mignonne, alors voir si la rose . . .»

### 0. はじめに

我々が花に引きつけられるのは、その美しさによってであろう。さらにその香りも見逃せない要素であろう。人間が植物を観賞の対象として花を用いるようになったのは文明を築き始めてから後のことで、シュメール、エジプト、インドの遺蹟や遺物のなかにその跡を見出すことができる。壁画に現われる人物像の飾りにされていた。植物を飾りに使うということは、それぞれの地域の文化の一端を示していて、観賞植物は、その地域の自生している植物から採用されたり、他地域との交流が進むと、その植物を受け入れて花に仕立てるようになる。シュメール、エジプトに続いてギリシアに文明が発達すると、地域の花として用いられるようになった。代表的な例としては、紀元前 1500 年頃に描かれたクレタ島の壁画は世界最古のバラの絵だと言われている<sup>1)</sup>。

ギリシアで用いられた花をローマが受け継ぎ、さらに新しい花を加えた。紀元前 350 年頃のテ

オフラストスの博物誌には剪定や挿し木などの栽培技術まで記されている。バラはギリシア・ローマ時代に栽培されていたが、イスラム文化が栄える頃になると、むしろ東方において盛んになり、十字軍がこれを持ち帰ったためカトリック寺院のステンドグラスにバラ窓が作られるようになった。ルネサンスに続いて大航海時代をむかえ、他地域との交流を深めたので他地域からの植物の導入は飛躍的に増大し、それらは富の蓄積する地域に集まり、落ち着くことになり、経済的発展の著しかったオランダ、イギリス、フランスでは園芸人口が増加し、花の栽培が盛んになった。そこで本稿では、ロマン諸語と日本語の故事・諺・成句にみられる花の名前による比喩表現を比較し、日本と西洋諸国の花と人間との関わりについて考察するとともにロマン諸語間の比較を通して共通点および相違点を明らかにする。

## 1-1-1. fleur

花の名前	種類	表現	意味	転義
fleur	隠喩 表面	à fleur de peau <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">R</span>	(皮膚の花→) 皮膚の表面に、張りつめた	花模様, 盛り, 最盛期, 精髓, 最良のもの, (複数で) 楽しさ・快適さ, 文飾, 処女性, ひいき, 白粉
	隠喩 同じ水準の	à fleur de qc. <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">R</span> <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">S</span>	(~の花に→) 同じ水準の, すれすれの	
	隠喩 手をつける	avoir la fleur de qc. <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">R</span>	(~の花を持つ→) …を最初に享受する, に手をつける	
	直喩 容易に	comme une fleur <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">R</span> <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">S</span>	(花のように→) 容易に, やすやすと	
	隠喩 褒めちぎる	couvrir qn. de fleurs = jeter des fleurs à qn. <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">S</span>	(人を花で覆う = 人に花を投げる→) に褒めちぎる, お世辞を連発する	
	直喩 美しい, みずみずしい	être belle [fraîche] comme une fleur <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">S</span>	(花のように美しい [みずみずしい] →) (女性が) 美しい (みずみずしい)	
	隠喩 無一文	être fleur <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">R</span>	(花である→) 文無しである	
	隠喩 をひいきする	faire une fleur à qn. <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">R</span> <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">S</span>	(人に花を作る→) をひいきする, …に花をもたせる	
	隠喩 感傷的	aimer la petite fleur bleue (aimer, cultiver などとともに) <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">R</span> <span style="border: 1px solid black; padding: 0 2px;">S</span>	(小さな青い花を好む →) センチメンタルである	

	隠喩 売春婦	fleur de macadam [de pavé, de bitume]	(碎石 [敷石, アスファ ルト] の花→) 売春婦, 街の女	
	隠喩 寵児	fleur des poids [S]	(重量の花→) 寵児, 伊 達男	
	隠喩 意気軒高と して	(la) fleur au fusil [S]	(銃の花→) 意気軒高と して, 張りきって	
	隠喩 ばか	fleur de navet	(navet 「カブ」 (間抜け の意の語尾音消失形から →) ばか, 間抜け	
	隠喩 適齢期を過 ぎる	passer fleur [R]	(開花期を過ぎる→) 娘 が適齢期を過ぎる	
	諺	Il ne faut pas battre une femme, même une fleur.	(花を持ってすら女を打 つな→) か弱き女性を優 しく扱わねばならない	
		Un serpent est caché sous les fleurs.	(花の下に蛇→) きれい な花には刺がある	
	隠喩 簡素に	Ni fleurs ni couronnes	(花も冠もなしに→) 供 花, 供物御辞退 (葬式通 知の文句) 簡素に	
	隠喩 死後にたた える	semer les fleurs sur la tombe de qn.	(墓の上に花の種をまく →) ~を死後にたたえる	
(ital.) fióre	隠喩 青春	essere in fióre	(満開である→) 青春で ある, 娘盛りである	最高級品, 精 華, 粹, 珠玉 選, (トラン プの) クラブ, かなりの量
	隠喩 精鋭	Erano il fióre dell'esercito.	(彼らは軍隊の花であっ た→) 彼らは軍隊の精鋭 であった	
	隠喩 美人	E un fióre di ragazza.	(彼女は少女の花である →) 彼女は絵に出てくる ような美人だ	
	隠喩 鑑	E un fióre di galantuomo.	(彼は紳士の花だ→) 彼 は紳士の鑑だ	
	隠喩 すれすれ	a fior d'acqua	(水の花に→) 水面すれ すれに	
(roum.) floáre	隠喩 血気盛んな	în floáre a vírstei	(年齢の花の中に→) 血 気盛んな	

	隠喩 つまらない こと	floáre la ureche	(耳に花→) つまらない こと, 取るにたらないこ と	
	隠喩 私生児	copil din flori	(花の子供→) 私生児	
	隠喩 開花する	a da în floáre	(花の芽が出る→) 開花 する	
(esp.) flor	隠喩 盛りに	en la flor de la edad [juven- tud, vida]	(年齢 [青年時代, 人 生] の花→) 若い盛りに	草花, 花盛り, 精髓, 選りす ぐりの物 [人], お世辞, 処女性, (果 実の表面に生 じる) 白い粉 (板金の表面 にできる) 虹 色
	隠喩 すれすれの	a flor de tierra	(地面の花に→) 地面す れすれに	
	隠喩 絶頂	en flor	(開花した→) 若さの絶 頂を迎えた	
	隠喩 最上の	de flor	(花の→) 最上の	
	隠喩 笑みが漂う	tener a flor de labios	(唇に花を持つ→) 笑み が口元に漂っている, 喉 元まで出かかっている	
(port.) flor	隠喩 すれすれに	à flor de . . .	(~の花に→) …とすれ すれに	草花, エリー ト, 粹, 精華, (青春・美・ 健康の) まっ 盛り, 美, 魅 力, 美人, 善 良な人, 優し い人
	隠喩 青春	flor da idade [ dos anos	(年齢 [年] の花→) 青 春	
	隠喩 温室育ちの 子供	flor de estufa	(温室の花→) 温室育ち の子供	
	隠喩 文飾	flores de retórica	(修辞学の花→) 文飾	

ロマン諸語に共通しているのは、花が青春、絶頂期、素晴らしい、代表的なの意である。フランス語では開花期を過ぎるから適齢期が過ぎる、イタリア語では満開であるから青春である、軍隊の花から精鋭、少女の花から美人、紳士の花から紳士の鑑、ルーマニア語とポルトガル語では年令の花から前者は血気盛んな、後者は青春の意。スペイン語では人生の花から若い盛りに、開花したから若さの絶頂。フランス語だけにみられるものとしては、直喩で美しい、みずみずしい、花でおおうから褒めちぎる、花を作るから最頂にする、墓の上に花の種を播くから死後を讃える、花の下の蛇からきれいな花には刺がある、花を持ってすら女を打つなから女性には優しくしなければならないという諺、花も冠もなしにから葬式通知の文句で簡素にの意、敷石の花から売春婦、花の下に蛇からきれいな花には刺がある、青の花からセンチメンタルの意、イタリア語だけにみられるものとしては、少女の花から美人、紳士の花から紳士の鑑、軍隊の花から精鋭の意、ルー

マニア語だけにみられるものとしては、耳に花から取るにたらないこと、花の子供から私生児、スペイン語だけにみられるものとしては、唇に花を持つから口元に笑みをたたえる、ポルトガル語だけにみられるものとしては、温室の花から温室育ちの子供、修辞学の花から文飾の意。

1-1-2. fleur・花による比喩表現の要因

	色彩	特性	諺 (ことわざ)	連想	引用 (音の類似)	その他	合計 R S
フランス語		1	2	11	(1)	3	18 R 8 S 8
イタリア語				4		1	5
ルーマニア語				4			4
スペイン語				4		1	5
ポルトガル語				3		1	4

1-2. anémone・アネモネ < lat. anemone < grec anemone ← anemos 「風」：風が吹くと花が開くとじられたことから

花の名前	種類	表現	意味	転義
anémone	隠喩 イソギン チャク	anémone de mer	(海のアネモネ→) イソ ギンチャク	
(ital.) anèmone	隠喩 イソギン チャク	anemòne di mare	(海のアネモネ→) イソ ゲンチャク	
(roum.) anemona				
(esp.) anemone	隠喩 イソギン チャク	anemone de mar	(海のアネモネ→) イソ ゲインチャク	
(port.) anêmona		anêmona-do-mar	(海のアネモネ→) イソ ギンチャク	

1-3. iris<sup>2)</sup>・アイリス < lat. iris 「虹」 ← grec iris1-4-1. coquelicot・ヒナゲシ < moy.fr. coquerico 「雄鶏」の異形：この花が雄鶏のとさかのよう  
に赤いところから

花の名前	種類	表現	意味	転義
coquelicot	直喩 赤い	être rouge comme un coquelicot	(ヒナゲシのように赤い →) (困惑や恥ずかしさ などで) 真っ赤な, 赤面 した	[菓子] コク リコ: ヒナゲ シ入りのボン ボン
(ital.) rosolaccio				虞美人草
(roum.) salbatic				
(esp.) amapola	直喩 赤い	ponerse rojo como una amapola	(ヒナゲシの花のように) 赤くなる, 頬を染める	
(port.) papoula				

フランス語とスペイン語のみ直喩でヒナゲシの花の色から赤いの意。

## 1-4-2. coquelicot・ヒナゲシによる比喩表現の要因

	特性	連想	諺	その他
フランス語	1			
スペイン語	1			

1-5. crocus<sup>3)</sup>・クロッカス < lat. crocus 「サフラン」 ← grec krókos1-6. cyclamen・シクラメン < bas lat. cyclamen ← lat.clas. cyclaminus ← grec kykláminos ←  
kyclos 「円」: 球根の形から1-7. dahlia・ダリア < lat. dahlia: A. Dahl (この植物をメキシコからヨーロッパにもたらしたス  
ウェーデンの植物学者+ ia

## 1-8. freesia・フリージア &lt; lat. freesia &lt; lat. freesia: F.M.T.Freese ドイツの医者・植物学者+ ia

## 1-9. glaïeul・グラジオラス &lt; lat. gladiolus: gladius 「剣」の指小辞, 葉の形から。

1-10-1. lilas・ライラック < arab. lilak ← pers. lailaj ← nilak 「青みがかった」

花の名前	種類	表現	意味	転義
lilas	隠喩 リラの花	la saison [le temps] des lilas	リラのは花咲く頃	リラの花, ライラック色, 藤色
(ital.) lilla	隠喩 薄紫色	Il cielo, a sera, si tingeva di lilla.	夕暮の空は薄紫色に染まっていた	薄紫色, 藤色
(port.) lilás	隠喩 藤色	vestido lilás	藤色のドレス	リラの花の色

イタリア語と, ポルトガル語のみ, この花の色から薄紫色 [藤色] の意。

1-10-2. lilas・ライラックによる比喩表現の要因

	特性	連想	諺	その他
イタリア語	1			
ルトガル語	1			

1-11-1. lis・ユリ < lat. liliūm ← grec léiron

花の名前	種類	表現	意味	転義
lis	隠喩 白い	peau de lys	(ユリの皮膚→) 雪のよ うな肌	白ユリの花, [詩語] 純白, 純潔, 無垢な などの象徴とな る, [紋章] フルール・ ド・リス (フ ランス王の象 徴としての) 自然のユリ, (ある種の罪 人の肩に推し た) ユリの花 形の烙印 [貨 幣] 金貨, 銀 貨
		Son visage de lis la rendait très belle.	(彼女のユリの顔が彼女を美しくしていた→) 透き通るように白い顔が彼女をたいそう美しく見せていた。	
	直喩 清純な	La mariée était blanche comme un lis	(花嫁はユリのごとく白かった→) 花嫁は白ユリのごとく清純であった	
(ital.) giglio	直喩 白い	blanco come un giglio	(ユリの花のように) 白 い, 純粋な	色の白い女, 聖女のような 女, 白い, 美 しい, 純粋な

(port.) lirio				純白, 清浄, 純潔, スズラ ン
------------------	--	--	--	-------------------------

フランス語とイタリア語ではこの花の白さから白い, 清純な (純粹な) の意。

#### 1-11-2. lys・ユリによる比喩表現の要因

	特性	連想	諺	その他
フランス語	2			
イタリア語	1			

#### 1-12-1. marguerite・マーガレット < lat. margarita ← grec margarites ← márgaron

花の名前	種類	表現	意味	転義
margue- rite	隠喩 恋占いをす る	effeuillir la marguerite [R] [S]	(マーガレットで恋占い をする: Il [Elle] m'aime, un peu, beaucoup, passionnément, à la folie, pas du tout と唱えながら, 花びらを1枚ずつむしっ ていき, 最後の1枚がど の言葉に当たるかで恋を 占う。	(昔の靴底革 の) 溝伏せ器, [海事] (錨や 大索を上げ下 ろしする) 補 助巻き上げ索 [織物] (アミ アンで作られ る) 毛, 絹, 麻の軽い織物
	引喩 豚に真珠	jeter des marguerites aux [devant les] pourceaux (豚の前にマーガレットを 投げる→) 豚に真珠 [聖書] マタイ福音書7: 6		
(ital.) marghe- rita	隠喩 恋占いをす る	sfogliare la margherita	(花卉をちぎって) ヒナ ギク占いをする	[古] 真珠 ラテン語の margarita 「真珠」の意 から

(esp.) margarita	隠喩 恋占いをする  隠喩 豚に真珠	deshojar la margarita  echar margaritas a los cerdos [puercos]	(ヒナギクの花弁をとる →) 花びらを抜きながら 恋占いをする  (豚にマーガレットを投 げる→) 豚に真珠を与え る	真珠, [貝] タカラガイ, (テキーラを ベースにレモ ンジュースを 加えて作るメ キシコの代表 的なカクテル
---------------------	--------------------------------	--	---	---

フランス語, イタリア語, スペイン語では, マーガレットの花びらを一枚ずつ取って恋占いをする風習のあることから恋占いをするの意, フランス語とスペイン語では豚にマーガレットを投げるというマタイの福音書の引喩から豚に真珠の意。

1-12-2. marguerite・マーガレットによる比喩表現の要因

	特性	連想	風習	引喩	その他
フランス語			1	1	
イタリア語			1		
スペイン語			1	1	

1-13. œillet・カーネション<sup>4)</sup> < œil ← lat. oculus の派生語

花の名前	種類	表現	意味	転義
œillet				イソギンチャク (~ de mer), 鳩目, (塩田の) 結晶池, [陶芸] ピンホール [時計] ぜんまいのひっかけ穴
(ital.) garofano				イソギンチャク (~ di mare)
(port.) cravo				馬蹄釘, にきび, うおのめ, クローブ (香辛料), クラヴサン (音楽)

1-14. pensée<sup>5)</sup>・パンジー

1-15. pivoine・ボタン < anc.fr. peone, pione の変形 < lat.pævonía (pæonía の異形) ← grec paionía (paiónis 「病を癒す」の女性形

花の名前	種類	表現	意味	転義
pivoine	直喩 赤い	rouge comme une pivoine R S	(恥ずかしさなどで) 顔 が真っ赤な	[鳥類] ウソ
(ital.) peonia				
(roum.) bujór				
(esp.) peonia				
(port.) peonia				

ロマン諸語の中で唯一フランス語だけが、この花の色から赤いの意である。

## 1-16-1. rose・バラ &lt; lat.rosa

18世紀初頭、ナポレオンの皇后ジョゼフィーヌは、世界中から250種類以上のバラを集めてマルメゾン<sup>6)</sup>の庭園を作り、わずか20年足らずの間に4,800種類以上の品種を次々と収集・作り出したと言われている。

花の名前	種類	表現	意味	転義
rose	隠喩 甘ったるい	à l'eau de rose R S	(バラの水の→) (映画、小説などが) 甘ったるい, おセンチな	ばら色の, [建築] バラ窓, [紋章] バラ, [宝石] ローズカット [鉱物] バラ石膏, [海事] コンパスカード, 処女性
	古・諺	C'est la plus belle rose de son chapeau. <sup>7)</sup>	(それは彼の帽子の一番きれいなバラだ→) それ が彼の最大の勲章 [成功, 取柄] だ	
	隠喩 秘密を嗅ぎつける	découvrir le pot aux roses <sup>8)</sup> R S	(バラの鉢を見つける→) 秘密を嗅ぎつける [暴く]	
	隠喩 投げ出す	envoyer qn./qc. au diable sur les roses R S	(人 [物] をバラの上の悪魔に投げ出す→) …を 投げ出す, うっちゃる, はねつける, 追い払う	

	隠喩 逸楽にふける	être couché sur des roses = être (couché) sur un lit de roses <sup>9)</sup> [R] [S]	(バラの臥所に横たわっている→) 遊惰な生活を送る, 逸楽にふける	
	直喩 血色がいい	être frais comme une rose [R] [S]	(バラのように) 顔の色艶がいい, 血色がいい	
	隠喩 肛門	faire feuille de rose	(バラの葉を作る→) 肛門をなめる	
	古・諺	Il n'est si belle rose qui ne devienne gratte-cul. <sup>10)</sup>	(どんな美しいバラでも最後は実になる→) 花は一時, 美女一盛り	
	隠喩 嫌なおいがする	ne pas sentir [fleurer] la rose [R] [S]	(バラのにおいがしない→) 嫌なおいがする	
	諺	Pas de roses sans épines [S]	(刺のないバラはない→) バラに刺あり, 苦楽相伴う, 楽あれば苦あり	
(ital.) ròsa	隠喩 味気ない	all'acqua di rose	(バラの水で→) いい加減な, どうでもいいような, 味気ない	集団, [建築] バラ窓, [宝石の] ローズカットのダイヤ, [ギターなどの] 響穴
	隠喩 楽な暮らし	trovarsi in un letto di rose	(バラの臥所にいる→) 人も羨む暮らしをしている	
	諺	Non c'è rosa senza spina	(刺のないバラはない→) 楽あれば苦あり	
(roum.) róza, trandafir	ことわざ	Nu e trandafir fara spini	刺のないバラはない	
(esp.) rosa	直喩 みずみずしい	como una rosa	(バラのように) みずみずしい, 健康的な, 爽快な, 心地よい	(皮膚の) 赤い斑点, バラ形のもの, [建築] バラ窓, (ローズカットの) ダイヤモンド, [紋章] バラの花, [複数] ポップコーン
	直喩 柔らかい	piel como una rosa	(バラのような皮膚→) 柔らかい [すべすべした] 肌	
	隠喩 くつろぐ	estar como las propias rosas	(自分のバラのようにいる→) とてもくつろいでいる	
	隠喩 楽な	La vida no es un lecho de rosas	(人生はバラのベッドではない→) 人生はばら色とは限らない	

	隠喩 楽観する	verlo todo de color de a rosa	(すべてをばら色に見る →) すべてを楽観する	
	諺	No hay rosa sin espinas	刺のないバラはない	
(port.) rosa	隠喩 楽な	Nem tudo sao rosas neste mundo	この世ではすべてはバラ というわけではない	ばら色の頬 (唇), 美しい 女性, [建築] バラ装飾, ローズカット のダイヤ, [複数] 幸福, 喜び
	隠喩 (天候が) 穏やかな, 晴朗な	de rosa	バラの→(海・天候な どが) 穏やかな, 晴朗な	
	ことわざ	Nao há rosas sem espinhos	刺のないバラはない	

ロマン諸語に共通する諺は刺のないバラはないということから苦楽相伴うの意。直喩ではフランス語の場合は血色がいい, スペイン語ではみずみずしい・健康的なの意。バラのベッドに横たわるという表現ではフランス語は遊惰な生活を送るの意, イタリア語は人も羨む暮らしをしているの意。スペイン語では人生はバラのベッドではないという表現で人生はバラ色とは限らないの意。これらは古代ローマ時代には「バラに臥す」というと, 贅沢三昧のことを意味し, ラテン語で, *in aeterna vivere rosa* 「永久に幸福に暮らす」の表現に基づくものであろう。バラの水でという表現では, フランス語は映画・小説などがおセンチな, イタリア語では味気ないの意。フランス語だけにみられるものとしては, 昔の風習でそれは彼の帽子の一番きれいなバラから, それが彼の最大の勲章の意, バラは昔は慎ましさの表徴とされていたことからバラの鉢を見つけるの表現で秘密を嗅ぎつけるの意。バラはいい香りを放つので, バラのにおいがしないということから嫌なにおいがするの意。スペイン語だけにみられるものとしては自分のバラのようにいることから, とてもくつろいでいるの意。これはバラのベッドに由来しているのであろう。すべてをバラ色にみることからすべてを楽観するの意。ポルトガル語だけにみられるものとしてはバラのから天気が穏やかなの意。

#### 1-16-2. rose・バラによる比喩表現の要因

	特性	連想	諺 (ことわざ)	風習	その他
フランス語	3	1	3	2	3
イタリア語		1	1	1	
ルーマニア語			(1)		
スペイン語	2	3	1		
ポルトガル語		2	(1)		

1-17. tulipe<sup>11)</sup>・チューリップ < lat.tulipa ← turc.tubent 「ターバン」：形の類似から

花の名前	種類	表現	意味	転義
tulipe	隠喩 おちょこになる	faire la tulipe	(傘が) おちょこになる	チューリップ形のもの (ガラスランプのかさ、ガラス器、貝、大砲など), (アンシャンレジーム下の) 陽気な兵隊
(ital.) tulipano				
(roum.) laleá				
(esp.) tulipán				
(port.) tulipa				ある種の) 貝の総称, ビール用の細長いグラス

2. おわりに

ロマン諸語では、花から青春、適齢期、血気盛んなどの意で共通している。花の中では、花の女王であり、古代ローマ時代から「バラに臥す」というと贅沢三昧のことを意味していたことからフランス語、イタリア語では、前者は遊惰な生活をするの意、後者は人も羨む生活をするの意など、スペイン語も含めてバラによる表現は豊富である。ユリはフランス語とイタリア語では白い、純粋な、清純なの意で共通している。マーガレットはフランス語、イタリア語、スペイン語では花卉をちぎって恋占いをする風習があるので、その表現がある。ボタンやヒナゲシについては、これらの花の色から直喩で赤いの意。バラを除けば、それぞれの花の代表的な花の色による表現である。他の花による表現が僅少であるのは、さまざまな色の多様性があることも一つの要因なのであろうか。花という言葉に対して、日本では桜、オランダではチューリップ、フランスではどのような花が連想されるのだろうか。花の歴史を振り返れば、おそらく rose (バラ) であろう。フランス人は la rose と聞くと、16世紀のフランスの詩人ピエール・ド・ロンサール Pierre de Ronsard が恋人カッサンドル Cassandre を讃えた à Sa Maistresse<sup>12)</sup> という次のような詩を思い出すようである。ロンサールは Amours de Marie や Les Amours d'Hélène の中でもバラモチーフにしたソネも書いている。

Mignonne, allons voir si la rose	Las! voyez comme en peu d'espace
Qui ce matin avoit desclose	Mignonne, elle a dessus la place
Sa robe de pourpre de Soleil,	Las! las! ses beautez laiss�e choir!
A point perdu ceste vespr�e	O vrayment marastre Nature,
Les plis de sa robe pourpr�e,	Puis qu'une telle fleur ne dure
Et sont teint au vostre pareil	Que du matin jusques au soir!
	Donc, si vous me croyez, mignonne,
	Tandis que vostre �ge fleuronne
	En sa plus verte nouveaut�,
	Cueillez, cueillez vostre jeunesse:
	Comme � ceste fleur la vieillesse
	Fera tenir vostre beaut�, <sup>13)</sup>

## 注

- 1) 「古代ローマ時代には、バラの花びらを大量に床に敷いて宴会を楽しんだそうです。当時『バラに伏す』というと贅沢三昧のことを意味し、そのあまりのエスカレートにバラは官能生活を助長し、神の教えに背くものとされて栽培が禁止されるほどだったとか！ 時代は下って王朝文化が盛んな17世紀のフランス。ここでもまた、バラは王侯貴族のステイタスシンボルとして、その華やかな姿は絵画や家具、建物の装飾などに用いられました」（「バラの歴史と変遷」<http://herb.hanagokoro.co.jp/UKrose.nsf/pages/his>
- 2) 「フランス王室の紋章をあらわす花が、アイリスなのかユリなのかは長く議論されながら、いまだにはっきりと決着がついていないが、Flower-de-luceという言葉がフランス語から来たものであることに異論はない。Flower-deluceはもともとはFleur de Louisつまりルイ王の花という意味だったとする説がある。12世紀、聖地へ赴く十字軍を率いたフランス王ルイ7世が楯印と旗印に選んだ花が黄花アイリスだったことから、アイリスのことをfleur de Louisと呼ぶようになったが、そのことがイギリスに入ってきてから、fleur de liceとかfleur de lysとか綴られるようになったために、ユリと混同されるようになったというのである。」(安部薫：「シェークスピアの花」pp. 105~106)
- 3) 「春一番に咲き、大地の宝石といわれるクロッカスがシャロンのバラであるとする説も有力です。クロッカスは東南アジアから地中海沿岸にかけて75種も生育しているということです。(安部薫：「聖書と花」p. 117)
- 4) 英語のcarnation < bas lat. carnatio 「肉に似ていることから」 ← lat. caro 「肉」：この花が肉色をしているところから
- 5) pens e 「考え」が語源である。この花の姿が瞑想に耽っているようにみえるところかららし
- 6) 「マルメゾン城はジョゼフィーヌ・ド・ボアルネの居館デアリ、テュイルリー宮殿とともに1800年から1802年の間でフランス政府機能がおかれた。マルメゾンとはマラ・ドムス(Mala Domus)すなわち悪しき家という意味であり、一般的には中世において山賊やノルマン人の侵入をしばしば経験したことがその名の由来と考えられている。1799年4月21日、ナポレオン・ボナパルトの妻ジョゼフィーヌ・ド・ボアルネがジャン・シャノリエの助言に基づいて銀行家ジャック＝ジャン・ルクトゥール・ドゥ・モレからこの城を購入したことにより、マルメ

ゾン城はフランス史に登場することになった。」(Wikipedia マルメゾン城)

- 7) この諺は *C'est le plus beau fleuron de sa couronne* (それは彼の冠の一番美しい花だ) ともいう。この帽子や冠は昔のフランス紳士が荘重な儀式のときに好んで用いたものであり、また騎士道華やかかなりし頃は敬慕する婦人の白い手で頭にかぶされた名誉のものであった。」(田辺貞之助:「フランス故事ことわざ辞典」p. 58)
- 8) 「薔薇はむかしは慎ましさの表徴とされていた。16世紀のイタリアの詩人タッソーも、薔薇は姿を見せることが稀ならば、いっそう美しさを増すと知っている。神話では愛の神キューピットが沈黙の神ハルボクラテスに初咲の薔薇をささげてヴィーナスの情事を隠すように頼んでいる。また薔薇の蕾が葉につつまれているところから、口が唇の下に舌をとらえておくのに見立てた。このようなことから人に打ち明け話をするときには秘密を守ってもらうために必ず薔薇の花を贈った宴会のときにもテーブルに薔薇を活け、酔いにまぎれてのおしゃべりを外へ洩らさないように教えた。フランス人はこの習慣をさらにすすめて、薔薇の鉢に蔽いをかけてテーブルの上においた。」(同上, p. 57)
- 9) ラテン語: *aeterna vivere rosa* (永久にバラで暮らす→) 永久に幸福に暮らす
- 10) 「絢爛を誇る大輪の薔薇でも花がしぼむとみじめきわまる姿になる。この諺はそれをいうので、実にこだわるべきではない。」(同上, p. 58)
- 11) 「春の庭の貴族はチューリップだろう。陽光を浴びて毅然としている。この新鮮な明彩色の愛らしい花があれば、誰の庭も立ち所に楽しげになる。そればかりでなく、この花のもつ静かな威厳は、それがかってごく限られた上流社会に出入りしていた時代があったことを私達に思い起させるのだ。(中略) パーキンソン(イギリスの植物学者)が次のように言っているのは、あながち当時の感傷の台詞ではなく現実のことだったのである。「チューリップはとても愛嬌のある形をし、着飾って長いこと衰えないので、立派な神氏淑女も皆その虜になってしまう」花の人気はどんどん高まり、ついに“チューリップ狂い”がオランダに吹きまくった1634年に至って、頂点に達した。熱狂が勢いづいたあげく、商人・地主・農民・船員・市民・召使、そして煙突掃除人や古着屋までが“立派な神氏淑女”と一緒にチューリップ投機の狂乱に参加した。オランダは世界の球根苗圃となり得る土壌に恵まれていることが、しだいに明らかになった。ハーレム(オランダ西部の古都でチューリップ栽培の中心地)を中心として巨大な球根産業が創設された。それは、世界中に何百万個にも及ぶ球根を送り出すシステムを持った世界的規模の産業だった。ドイツに破れた1040年には、オランダは年間一億個のチューリップの球根をアメリカに輸出していたのである。かくして三世紀前の“チューリップ狂い”の瓦解に続く苦悩と迷妄から脱出して、オランダ人は、あの狂乱の投機の時代にすら想像できなかったほどの巨額の富を、国にもたらす産業をつくりあげたのである。」(A. アンダーソン著、竹田雅子訳:「花の歴史」pp. 1~12)
- 12) Ronsard: *Œuvres complètes*, pp. 419~420
- 13) 篠沢秀夫:「立体フランス文学」, p. 27

## 参考文献

- 安部薫著(1992):「聖書と花」, 八坂書房  
 安部薫著(1997):「シェイクスピアの花」, 八坂書房  
 A. アンダーソン著、竹田雅子訳:「花の歴史」, 八坂書房  
 池田峯夫他編(2003):「現代ポルトガル語辞典」, 白水社  
 池田廉他編(1993):「伊和中辞典」, 小学館  
 桑名一博他編(1990):「西和中辞典」, 小学館  
 「講談社大百科事典」第21巻(1982), 講談社

- 篠沢秀夫著 (1970) : 「立体フランス文学」, 朝日出版社
- 小学館ロベール仏和大辞典編集委員会編 (1998) : 「小学館ロベール仏和大辞典」, 小学館
- 尚学図書編 (1982) : 「故事・俗信ことわざ辞典」, 小学館
- 鈴木信太郎他著 (1987) : 「新スタンダード仏和辞典」, 大修館書店
- 田辺貞之助編 (1977) : 「フランス故事ことわざ辞典」, 白水社
- 田村毅他編 (2005) : 「ロワイヤル仏和中辞典」, 旺文社
- 直野淳著 (1984) : 「ルーマニア語辞典」, 大学書林
- Ronsard (1950) : Œuvres complètes texte établi et annoté par Gustave Cohen, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard
- A. Rey et S. Chantreau (1985) : 《*Dictionnaire des expressions et locutions*》, Paris, Robert